

隨泉寺寺報

2002 年 10 月号 第 386 号 082-892-0217

浄土真宗本願寺派 高峯山隨泉寺

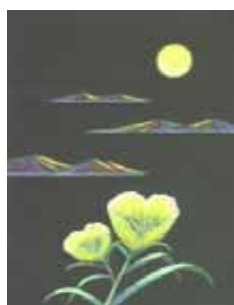
秋季永代経法座

講師 中区寺町 実相寺住職

相 唯信師

講題 「本願に会う」

秋の日はつるべ落としといいますが、夕闇が早く訪れるような季節となりました。病院などで一番寂しいときが夕暮れ時だそうです。夏の暑い日は早く夜が来て少し涼しくなればいいと思っていましたが、一日が短くなったような気がします。これからは夜のほうが長くなっていくのでしょうか。この間、灯茶会で静かに耳を凝らしてみたら、虫の声のきれいなこと、毎日鳴いていたのでしょうが、全然耳に入っていませんでした。石川啄木が【歌集】『一握の砂』のなかで《まれにある この平なる心には 時計の鳴るもおもしろく聴く》と詠っています。考えてみると、虫の声が聞こえてくるような、ゆっくりした時間を持っていなかったのかなあと、少し寂しく思います。耳を澄ませてみるとこんなにきれいな声で、毎日鳴っていてくれたのかと思うと、それに気付かないでいた自分が、恥ずかしい気がします。それだけ心は平ではなかったのでしょうか。《友がみな / われよりえらく見ゆる日よ / 花を買ひ来て / 妻としたしむ》



10 月の行事予定

- 10月14日 昼席午後1時より……… 秋季永代経法座
- 10月14日 夜席午後7時半より……… 出張法座 出口・宮原集会所
- 10月15日 朝席午前10時より……… 65歳以上の集い
- 10月15日 昼席午後1時より……… 秋季永代経法座

「白河の清き流れに住みあきて むかしの田沼いまはなつかし」
時代小説の第一人者である平岩弓枝の最新作「魚の棲む城」を読んだ。
日本史などで知った田沼意次・意知親子は、江戸時代の賄賂が横行した腐敗した政治の代表格で悪徳政治家といわれた。

田沼意次は、本当に悪徳政治家だったのか・・・。
微禄の旗本の家生まれながら、その誠実で豪放な性格から、さまざまな人々の心を掴み、異例の出世を遂げてゆく男、田沼意次。
一方で彼は幼馴染との友情を何より重んじる「義の男」であり、幼い頃の女性との愛を、幾多の困難を乗り越え貫き通す「情の男」でもあった。
江戸中期、大きく変化しつつあった商業経済と近づく欧米列強の影の中、100年先の国を案じ、改革を進めようとする田沼。しかしその前に、彼の急激な出世を嫌う「守旧派」「松平定信」が立ちはだかる・・・。
印旛沼の改修、港の開港、家の瓦葺の励行など、今思えばどれもが大切なことだけれども、しかし時代が50年早過ぎた。やがて田沼親子は失脚する。様々な根も葉もない噂によって。平岩弓枝の最新作「魚の棲む城」では田沼親子はまことに魅力的な政治家である。

しかしこれを読んでいてふと現代の日本政治を思った。何か北海道の「ムネオ」という人を思いだした。彼も昔、政治に志を持った頃は、人々の為に、社会の為に、お国のためにという高邁な理想と熱意を持って選挙に出たのだろう。しかし権力を持つとやがてはいつのまにか大切なものを見失うのである。天魔、破洵ということがある。天にいる悪魔である。有頂天にあがるとまさしく自分を見失い、他の事が見えなくなってしまう。

65歳以上のつどいご案内

10月15日永代経法座二日目に65歳以上の集いを致します。お忙しいと思いますが誘い合わせてお参り下さい。

御礼

門信徒会へ 金一封 中塩 周三殿 香典返しに返えて
永代経懇志 壹拾萬円 中塩 周三殿 故中塩 トミエ様永代経志として

灯火茶会

9月21日第2回の灯火茶会を行いました。今年はちょうど中秋の名月の日でした。庭の明かりもきれいでしたし、虫の音もよく聞こえてなかなか素敵な夜でした。今年は月もほんとにきれいに見えて、風流でした。しかしながら、参加者が少なかったため、残念でした。来年はぜひたくさん参加してください。

父を語る

長男 平原錬一

父は、平成6年頃腰痛で医者に掛かり腹部に5cm位の大動脈瘤があることが判った。それから手術をする、しないで家族で再三にわたり話し合ったが、父は頑として手術をしないと断った。定期的に日赤病院で大動脈瘤の状態を見守ってもらっていたが9cm位の大きさとなり、医師より何時はじけてもおおしくない危険な状態だから、手術をされた方が良くと勧められた。父もやっとその気になり、去年の6月25日、日赤病院に入院をし7月9日に手術を受けましたが、出血が止まらず又肺や腎臓も異常をきたし7月26日、享年91歳を一期として永眠致しました。

私は、手術前には元気であつた父に手術を進めた事が悔やまれた。

私は終生この思いを抱き続けるであろう。

父(利幸)は明治43年9月21日、安芸郡中野村で生まれている。昭和16年に10歳年下の山村初枝と縁あって結婚、一男二女の三人の子供を授かる。私は待望の男子とあって、随分父に期待されていたと姉妹は口を揃えて言う。長男で有りながら親と同居せず、父に寂しい思いをさせ、父の期待に応えられなかった為、親不幸な息子であったと思う。そんな私に父を語る資格があるか、ためらいもある。



父は苦勞人であつた。母が病弱であつたせいか、朝早くから家事をして役所へ行く姿が今も思い浮かぶ。休みの日もゆっくりと休んでいる姿を見たことがない、無論我々子供たちもよく手伝った。庭の掃除、雑巾掛け、買い物等何でもさせられた。特に姉は小学生の頃、六歳年下の妹を背負って家の手伝いをしていた事もある。

又父は道徳にうるさく、当たり前のことだが、人の立場になって物を考えよとか色々と言われたおかげで人の道を外れることなく生きてこられたのも父のおかげである。父は、昭和6年に可部税務署に採用され、内務省、山口県庁で勤務の後昭和22年に広島県庁に帰り、用度課長時代には部品管理制度を、厚生課長時代には生活保護制度、副出納長時代には財務会計制度、人事課長時代には給料制度、出納長時代には会計規則をとそれぞれ現在の行政制度の基盤作りに尽くしてきたと聞いております。そして昭和63年日本赤十字社広島県支部事務局長を最後にリタイヤした。

昭和57年、勲四等旭日小綬章を受章。父はリタイヤ後生まれ故郷の中野に戻り好きな庭の手入れ、孫達との会話を楽しんで余生を穏やかに送った。

今年の夏もようやく終わろうとしていた9月のはじめ、15年一緒に住んでいた、愛犬ベルが突然死にました。15歳というと犬にしてみれば長生きのほうでしょう。人間の年に換算すれば80歳以上の高齢かもしれません。けれども夏前までは非常に元気で、まだ子供のようなところもありました。しかしやがて別れはくるかなと子供達とも、話していました。少し目も白内障のようで白いかすみのようなくもりが見えてましたし、耳も遠くなってました。

その日も元気で、朝早く母が散歩に連れて行ってくれました。帰る途中でウンチをしたらしく、その時に気張って心臓に負担がかかったのか、そのまま動かなくなったそうです。母が抱いて帰って、【ベルが調子がおかしいので見て】ということで、行って見ると、横になって大きな息をしていました。苦しそうなので【おい、ベル、大丈夫か】と声をかけました。しかし苦しかったのでしょう。首だけを上にあげて何か言いたそうにしていました。娘も心配そうに【ベル、ベル、元気出して】と声をかけていました。【お父さん、病院に連れて行ってね】と念を押して娘は学校に行きました。それから2~3分の事です。急に首を上げてふた声ほど[クーン、クーン]と鳴いてドタッと倒れました。まさしく《息絶えおわんぬ》です。見事な死でした。



それからは私のほうがうろたえてしまいました。坊守りを呼んでどうしようかとおろおろしてしまいました。子供に電話すると、子供も泣いています。子供が学校から帰ってから、みんなでお葬式を勤めました。悲しい、悲しいお葬式です。しかし儀式というものは大切なものです。お葬式を済ませたら、少し気持ちが落ち着いてきました。死を受け入れる事が出来たのでしょうか。悲しいのは悲しいのですが、事実を認める事が出来たようです。

それから裏山に葬ってやりました。穴を掘って埋めるとき、【今度生まれてくる時は、人間に生まれてこいよ】といいかけて思い直しました。そして【お浄土で待っていてくれよ、またお浄土で会おう】といいました。すると娘が【お父さん、ベルもお浄土に生まれる?】とききました。【間違いなくお浄土に生まれるよ、それは仏様の本願に、全てのいきとし生きるものをすくうと誓われてあるのだから。だけどベルはそのことを知らない。だから喜んでいいない。お寺の中に住んでいながらも、言葉が分からないから仏様のことも知らない。しかし救われるのは間違いのないよ。人間はそのことを知っているから、ありがとうございますというお念仏が出るのだよ】すると娘は【よかった、又ベルと会える】と喜びました。